

令和4年度第2回津島市人権施策推進審議会 議事録

令和5年3月23日(木) 午後2時から午後3時15分

津島市役所4階大会議室

出席者

委員 (◎：会長 ○：副会長)

○水谷瀧男委員、◎黒田剛司委員、鈴木悦子委員、相村明人委員、
加藤栄一委員、野田勝子委員、遠松奈津子委員、竹本都美子委員、
木村智衆委員

事務局

安井市民生活部長、前田人権推進課長、伊藤統括主任、山口主査

欠席者

小澤功子委員、前田慶子委員、青木啓委員、三輪宮子委員

1 会長あいさつ

2 議題

人権教育推進事業について

黒田会長

それでは、次第により議題に入らせていただきます。人権教育推進事業について、事務局から説明願います。

事務局

[説明]

黒田会長

それでは、事務局の説明についてご意見をいただきたいと思います。

まず私からですが、分野別に人権の主な課題を網羅されていると思われるのでよいと思う。また、津島市人権教育推進事業報告書の水谷先生が行われた講座の資料に、関わること・つながることを意識して、部落と部落外の交流・まちづくりを進めていきたいとある。各個人の意識はともかくとして、垣根を取り払って進めていくということが水谷先生の経験談から有効なことだと考えられたのだと思う。今後の部落差別、同和問題について有効なご意見だと感じた。

また、障害者の差別について、最近合理的配慮という言葉が取り上げられており、企業・職員・市民向けに合理的配慮とは何かを知り、何をしなければならないかを考える講座等が必要になってくるのではないかと感じた。

高齢者や障がいのある人、その介護家族について、介護施設よりも家族による虐待案件が圧倒的に多く、年々増えてきている。家族に対して、手が出る前に相談する方法等の啓発について今後この審議会でも大事になってくるのではないかと感じた。啓発という観点が必要だと思ふ。

A委員

部落差別、同和問題で一番問題なのは偏見。身近に感じるものとして、あそこに住んでいる人はどうという話はとても多い。差別者に対して、どのようにして理解を求めていくかが課題。一生懸命理解を求めても、なかなか理解を求められないのは、活動不足があるかもしれないが、行政としても、偏見はいけないと訴え続けていくことが必要だと思う。部落差別だけでなく、障がいを持つ人でも同じことがいえる。これでもかこれでもかというほど、訴えていくこと。行政側の啓発がどれだけ寄り添っているかということはこの審議会を確認しながら、方向性の話しをすることが大事ではないかなと思う。偏見からくる差別はたくさんある。良い方法を見つけながら啓発をしていくことが大切。

また、アンケートについて、良かったという回答ではなく、悪かったという回答について、どのように理解を求めていくか考える必要があると思う。

B委員

先般、新しく南地区民生児童委員の地区会長になられた方から、部落差別について勉強したいという要望があり、市人権推進課に相談し、県から講師を派遣してもらって研修を行った。18人が受講し、良かったという意見があった一方で、研修の必要性について疑問を呈される方もいた。地区ごとで年に6回ほど機会があるので、そういった時に市もDVDは沢山あるし、県にもありますよね。

事務局

あります。

B委員

上手く使って、年に1、2回でもいいから部落問題に限らず高齢者や障害のある人なども啓発すると良いと思う。民生児童委員は現在何人ぐらいでしたでしょうか。

C委員

120人前後かと思う。

B委員

それらの方々に啓発をすることで地域の啓発活動にもなるから、もっと民生児童委員に啓発をおこなっていったらどうだろうかというのが、よりよい啓発についての私の意見。

A委員

県は昨年人権条例を出したが、条例を出したから終わりではいけない。中身を充実させなければならない。これは私たちの仕事でもあるが、一緒になりながらやっついていかないと。津島市でもだいぶ前に人権条例を出している。今以上に取組みをしていくにあたり、事業を実施するには予算が必要。そのための予算を今以上に付けてもらい、障害を持つ人、子どもの虐待がなぜ起こるのか、なぜいけないのかの根本を掴み、啓発や教育をしていくことが必要だと思う。子どもが親に殺されたという事件があったとき、そこでは何があったのか。暴力行為が津島で仮に無かったと

しても、どこかでは起こっている。この問題について、教育の部分だから私たちは知らないという状況は作ってはいけない。その辺りを研究して、もう一歩前に進んでもらえる状況を作ってもらえればとても良いと思う。

D委員

最近のニュースを見ていると、人を人と思わないという行為を、コロナが加速させていると感じる。フィリピンから人を操作して殺させた事件といった命そのものに関わる事件が起きている。親を殺す、誰でもいいから殺したい、そして小中高生の自死が512名だったかと思うが過去最高となったと言われている。自死することはどの人権が関わってくるかというところはあるが、残された家族には様々な人権が関わってくると思う。

教育関係でみていると、最近では自分だけでなく他人の幸せも考えるウェルビーイングという考え方が根底にある。そのためには当事者意識を高めないといけないということが一番強く言われている。人の立場に立って、自分のこととして考えることを教育として進めていかないと、どうせ人のことだからとなってしまう傾向が強い。そこを踏まえると、先ほどの民生児童委員の件はお互いの本音の話から人の思いが出てきて、お互いがどう思っているかを生で掴むことができる。ただ研修で話を聞いて終わりという問題ではないなと感じた。当事者意識や事例をあわせると、正しいことを知るのは絶対に大事なこと。間違ったことを知ることは偏見に繋がる。その人の立場に立つにはロールプレイやワークショップといった体験的な研修の方が良いのではないかと思う。知識を得るだけだと、それで終わりになってしまうのではないかを感じる。

性的マイノリティの方のカミングアウトについても、芸能界やマスコミ経由でなされてきて、沢山出てきているから自然に受け入れられるようになりつつある。こういったことを通して、そういった人もいるよねと認め合う形になるのだと思う。ヤングケアラーの方は、親から言うなと止められていたり、それが当たり前と思って就職も進学もしないでいる傾向が強いということも聞いている。周りが早く気づいて、手を差し伸べなければならない。そのためには、正しいことを体験的に知ることが大事になってくるのではということをお互いの意見を伺って思った。

E委員

アンケートの部落差別の部分にもあるが、私たちの世代で部落問題を扇動する人がいないということもあり、他人事になってしまい、知ることなく育った。PTAの役員向けに講座をしていただくといいのでは。複数世代で同居している方もいるかもしれないが、複数世代で同居している私は聞いたことがない。祖父母世代が思っていたとしても、話題に出すことがない。正しいことを知らないために、失礼なことをしていたり、よくないことがあってはいけないので、知りたいと思った。これからもPTA役員への研修を続けてもらいたいと思った。

F 委員

部落差別に限らないが、子どもが小さい時から、なぜこのようなことが起こったのかということを知っていかなくてはならない。正しく理解できるように大人が導かなければならない。

G 委員

私は障害者福祉施設で働いているが、偏見はすぐに知れ渡り、みんなが避けるようになる。小さなことも大きなことになる。せつかく来ている方だし、みんなが仲良くしていきたいので、避けられている方とも根気強く話してはいる。

黒田会長

私たちの世代だと、そういった意識はあまりない。数十年前と比べたら変わったと思う。最前線で活動していた方は目にされてきているかとは思いますが。

A 委員

一番大事なことは教育。小さい時からすべての差別はいけないと言われていながら、祖父母世代になると、あそここの人はこういう人だからという植え付け方をしてしまう。そこが問題だと思う。しっかりとした教育がされていれば、おじいちゃんおばあちゃん、なんでダメなの？と言える。そこまではなかなかいっていない。偏見からくる差別をしている人は、そこで正しく言い返せない。どこにだって悪い人はいる。特定の地域でくくるのは絶対に違う。正しい歴史と知識を小さいころから教えないといけない。そこに住んでいる人が勉強会をしよう、ここに集まったメンバーが協力しますよという形をつくれたらと思う。

C 委員

私の住んでいる地区では部落差別という問題はまず出てこない。関わる人が多いのは一人暮らしの高齢者の方。民生児童委員は全ての世代が対象だが、子どもとの関わりはまずない。コロナになったときに小学校等に消毒液を届けたりはしたが、直接話すことは無かった。もう少し子どもと関わることをできたらと思っている。

水谷副会長

最初に私の講座の資料を取り上げていただいたが、私の気持ちがそこに書いてある。とにかく関わってほしい。私自身は部落差別に関わってきた経験がある。以前部落差別があった地域に赴任することが決まった時、周りの誰もが大変なところに行くなあ、気をつけろと言った。思い出してみれば、親にもあそこにはいくなと言われた。そこで、そのまま過ぎ去ってしまっていたら、私は今この立場にいない。人にはいろいろな人がいるのだから、関わらなければいけない。そういう思いで赴任し、いろいろな人と関わった。現場で当事者の方から困りごとや悩みを感じ取った。8年間関わり続けたが、その中で、これから部落差別にどう関わっていけばいいかと考え、退職後10年以上いろいろなところで話し続けている。相手の立場に立って考えることをしてほしいということをお願いしているが、大人の考え方を変えることは難しい。子どもは素直に受け入れてくれるが、先ほども話があったが、親から

子へ伝わる偏見をどこかで変えなければならない。何回も私の話を聞かれる方もいると思う。津島でも今年度2回講座をさせてもらったが、繰り返し話していくことで関わる人や聞いてもらう人を増やすことが大切だと思っている。資料の最後に、私の好きなふるさとという詩を載せているが、部落差別をされた人を含めて誰もが自分の生まれたふるさとを堂々と言える社会に、ふるさとに誇りをもてるようになってほしいと思っている。自分さえよければいいということではいけない、みんなが幸せになる社会をつくるのが、人権ということで大切だと思う。

黒田会長

みなさんありがとうございました。それでは議題を終了しその他へ入りますので、事務局へお返しいたします。

3 その他

(1) 令和4年度人権講演会について

(2) 令和4年度津島人権擁護委員協議会津島地区委員会活動内容の紹介

(3) メディアを活用した人権啓発について

事務局

ありがとうございました。それではその他としまして、人権講演会の報告、今年度の津島人権擁護委員協議会津島地区委員会の方々の活動内容のご紹介、メディアを活用した人権啓発について説明をさせていただきます。

〔説明〕

黒田会長

メディアを活用した人権啓発についてかなり具体的になってきていて、令和5年度から本格的にスタートということで、この場に出されたご意見を反映していただいてよかった。これを通して少しでも啓発になればよいと思う。人権講演会について、報償費はいくらだったか。

事務局

交通費込みで最大13,000円。

黒田会長

なかなか講師をお願いするときに知り合い伝いになったりと人選が難しい。良い講師をさらにお呼びしようと思うと、予算が追い付かない。決まりがあるがもう少し予算が付けばよいと思う。ジレンマに陥るような状況ではある。

A委員

メディアを取入れるのは大事だと思う。見る人が少ないということはあると思うが、流し続けることが大切。また、取組みを広報などで宣伝することも大事だと思う。先日の人権講演会の先生も、もっと深いところの見分もお持ちだそうなので、そういった話もしてもらえるようにしていくとよいと思う。市民に対して理解を求

めるためにすることは宣伝。

黒田会長

今後、クローバーテレビでの啓発等が進めば、人権講演会のあり方も変わってくると思う。差別は偏見から生まれる。人間の心から生まれる。小さいころから偏見や差別をしてはいけないと伝えることはあらゆる人権問題につながる。これをどうしていくかということは今後の課題かと思う。今回のクローバーテレビの取組みは他でもなかなか見られないことだと思う。愛知県の方でも周知したいと思う。

A委員

愛知県の交渉の場でも話したいと思う。水平社の人権宣言、人の世に熱あれ、人間に光あれという言葉は本当に大切なもの。ぜひ覚えてもらいたい。

事務局

ありがとうございました。本日の津島市人権施策推進審議会を閉会させていただきます。次回の開催は6月21～23日、29日、30日をいずれかにて予定しております。来年度につきましても、いただいたご意見を念頭に置きながら事業を実施していきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。